



2022年

12月第1・2・3週の主日礼拝説教要約

・12月 4日：ルカ福音書 1：26 - 35 (-45).

『 神のもとの恵み 』

・12月11日：マタイ福音書 1：18 - 23 .

『 天使と狼狽 』

・12月18日：ルカ福音書 1：67 - 80 .

『 先立つ預言者 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

紀元前2世紀から前1世紀にかけて築かれたハスモン・マカベヤ王朝の時代には、古代のダヴィデ王家の子孫は、もう既に、何の力も持たない一般のユダヤ人と化し、中東地域に散在していました。イエスがそんな家系の出であったとしても、特別な待遇を受けることもなく、はた目には「ナザレの大工のヨセフの息子、イエス」以外の何者でもありませんでした。

ただ、イエスの母のマリアは、息子イエスを身籠る時に天使ガブリエルのお告げを受けています、「あなたは神のもとで恵まれている、あなたは身籠って男の子を生む、イエスと名付けなさい」と。彼女は驚愕します。このお告げは、天上の歓喜とも相俟って、もたらされていたのです。

さて、彼女の親族には、アロン家の家系に属するエリザベツという、ずっと年上の女性がいて、ナザレからは遠く離れた南のユダの高地に住んでいました。実は、この人もマリアよりも半年(?)ほど早く、神殿祭司の夫を介して天使から懐妊の告知を受けており、すでに身重になっていました。この事実はナザレのマリアにも天使から告知されており、身軽な方のマリアがユダの高地を訪問することで、両者は互いの身の上に起きていることを確かめ合うこととなり、まだ結婚前の自由の身のマリアは3か月もの間(ルカ1:56)そこにとどまりました。

古代の人々はこう考えました。この3か月間こそ、不在のマリアの許嫁(いいなずけ)のナザレのヨセフが逡巡のすえ、妊娠中の乙女マリアとの結婚を決断するために、天から付与された時間であったと。

さて、それから、おそらく数か月後にナザレのヨセフとマリアは相次いで結婚と出産を経験します。出産は遠く離れたベツレヘムの屋外で、さらに、息子のための割礼、神殿詣でも必要不可欠でした。また、困ったことに、ヘロデ大王の男児殺害計画から逃れてエジプトへの避難をも余儀なくされます。こうして家族は多忙をきわめます。ナザレへの帰宅も儘ならず。読者は考えます。エジプト以外にも何処かに滞在場所が必要ではなかったかと。この難問を解決してくれる有力な場所が、少なくとも一つありました。そこは、独身最後にマリアが3か月間、滞在した親族のエリザベツの住む家です。そこはユダの高地、伝説によればアイン・カレムという、エルサレムから西に7Kmほど離れた山村だったようです。今日、そこには「聖ヨハネ教会」と「聖母訪問教会」が立っています。

マタイ福音書の1章の始まりは、ユダヤ民族の父アブラハムから始まる、17節にもおよぶ長い系図の最後に、イエスのナザレの父親ヨセフが、その父ヤコブの息子でダヴィデの子孫であったことを証します。

そして、いきなり、ヨセフの許嫁（いいなずけ）のマリアの妊娠の話に突入します。けれども、どこからどこまでが天使による「夢のお告げ」なのかは判然としません。ヨセフの寝起きのタイミングに関する細かな情報も一切ありません。19節から20節にいたる、彼の心理的葛藤は夢の中の出来事とは考えられせん。

考古学では、当時のガリラヤのナザレの村の人口は100人程度ではなかったかと推定します。その中にもし結婚適齢期の男女が居住していたのだとすると、男女の組み合わせは、ほんの数通りしかできません。おそらくヨセフとマリアは幼いころからの顔見知りでした。ヨセフはさぞかし狼狽したことでしょう。この縁がもし破綻したら、人生、何が待っているのか分からない。マリアの村八分か、自分が自主的に村から出て行くことになるのか。平均寿命が30歳に満たない古代社会には、もう時間の余裕もありません。けれどもヨセフの決断が、一朝一夕のものだったとは到底考えられません。義人のヨセフの頭には、「人として」正しく生きるためには不可欠の筋道（道理）がありました。

ルカ福音書によると、ちょうどその頃に独身のマリアは何と、3か月もの間、ナザレを留守にして、遠く離れたユダの高地の山村（アイン・カレム？）の親族のエリザベツの家に滞在していたことが分かっています。ヨセフが、すでに妊娠中の許嫁と離縁しようにも相手が目の前にはいません。これは神から授かった大切な時間であり、同時に彼の一世一代の重大な決断を迫る期間でもあったはずです。

現代とは違い、古代社会では結婚の自由は保障されません。Aさんはだめ。Bさんもちょっと…、でもCさんならOK、と、選べるほどの相手はいないのです。ごく限られた条件に照らし合わせて、両家の縁談がとどろいて初めて許嫁が決められ、一定の時を経て結婚します。結婚相手は歴とした授かりものなのです。ただ、その相手が、既に子供までも授かっていたとなると、話は複雑です。この秘密はマリアとヨセフ、さらにユダの親族のエリザベツ（と夫のザカリヤ？）にしか知らされていなかったのです。

幼子は成長し、その霊は強くなり（霊に強められ）イスラエル（の人々）の前に現れるまで、荒れ野にいた。

ルカ福音書の1章の最後は、そういう言葉で締めくくられています。イエスよりも（半年ほど？）早く誕生していた洗礼者ヨハネが、成長後に活動を開始するまでの期間、荒れ野で待機していたのだと。

さて、彼の父親のザカリヤの預言を読むと、ヨハネの活動にはある一定の期間を要することが見て取れます。「清く正しく主の御前で仕える」ために。福音書の記述では彼の誕生後から、ナザレのイエスが目の前に出現し、洗礼を授けるまでの道のりの記載がありません。その後の僅かばかりの活動の継続後、彼はもうすでにヘロデによって投獄されており、以後の活動は、牢獄から指示を受けたヨハネの弟子たちが代行しました。

よって、洗礼者ヨハネのヨルダン川における活動は、おそらく福音書の記述よりも、もっと前からはじまっており、彼の弟子たちもたくさんいて、その中からヨハネに感化され、後にナザレのイエスの弟子になる者らが輩出したと考えるのが自然です。ただ、イエスからたしなめられる弟子たちの稚拙で消極的な思想や、過激な思想が、ヨハネから受け継がれたものなのか、彼らの生来のものなのかの識別は困難です。むしろ、彼らのことでは、ヨハネもイエスと同様に苦勞を強いられていたのかもしれない。

さらにザカリヤの預言によると、ヨハネの前には明らかに「憎むべき敵対者」が存在し、彼らのせいで苦しむ人々がいます。その人々を救出することが主なる神の御旨であり、その神に仕えることこそがヨハネの使命であるようです。この点は、後を継ぐ者らの中でも不一致はありません。

ただ、ヨハネもイエスもなき後になって、弟子たちが「毎日ひたすら心を一つにして神殿に集まり…、民衆全体から好意を寄せられた（使徒言行録2：46・47）」ことは、先達には無かった、慣習への同化でした。

使徒たちの時代に移行した後にも、主（あるじ）を欠いたヨハネの弟子たちの中からキリスト教会に転入してくる者たちがいたことがわかっています。

3世紀以降に出現する、いわゆる「砂漠の教父たち（隠修士）」の生活スタイルは、再び洗礼者ヨハネの生き方に回帰したものと思われる。